

Newsletter

September 2005

<http://www.aack.or.jp>

目次

五三年前の厳冬期知床遠征をふりかえって(その一)	齋藤 惇生……………1
発端と岬隊の記録	
ボリビア・アンデスの山旅(その一)	阪本 公一……………5
AAACK人物抄	
伊藤洋平さん(二九三三―一九八五)	平井 一正……………9
鈴木信さん追捕 ―野田吉兵衛、近藤公夫両氏 からのコメントの紹介―	平井 一正……………14
会員動向	……………15
訂正	……………15
第二回雲南懇話会と 第一回「Field Work」のお知らせ	……………15
編集後記	……………16

五三年前の厳冬期知床遠征を ふりかえって(その一)

発端と岬隊の記録

齋藤 惇生

昨年日本山岳会のアルパインスキークラブの会報誌「雪上散歩」にたのまれて、「五二年前の厳冬期知床遠征」という題で執筆した。山岳部の報告第三号に知床遠征が詳細に報告されている。それを参考にして書いたのだが、報告にない多くのことが思い出されてきた。これらのことも、歴史の一齣として加え、また知床について書いてみた。

知床遠征の発端

戦後創立された京大山岳部は、新制大学入学者の入部、旧制三高山岳部員の合流で部員も増加した。時の藤村良ライダーが提唱したステップバイステップをモットーに山行を実践して着実に力を貯え伸ばしていた。

一九五二年の「岳人」



冬の知床半島の山々(左から、羅臼岳、無名(当時)峰、硫黄山、右端知床岳) 羅臼温泉上部よりの撮影 1953.1.5 寺本 巖

六月号に「知床の山々、一つの提言」という記事が載った。北海道にまだほとんど手がつけられていない山が残っている。それは知床半島の山々だ。参考文献もロクにない。現在のわが国で最もとり残されている地域でないか。誰かこの知床の山々へスキーをすすめる者はいないか。執筆者はXYZとなっていた。私はこれを読んだ時、日本にまだこんな所があるのか、しかし行くとしても遠いしたいへんだなあーと思った。しかし知床の二字は妙に頭に刻みこ

まれたのだった。

しばらくしてルームにいつものようにみな
がたむろしていると、伊藤洋平が現われた。
そして北海道の東のはてに知床という半島が
ある。文献も登山記録も無い、寒さも厳しい。
厳冬期にその登山をすればヒマラヤ遠征の
トレーニングになるだろう。山岳部の冬の合
宿として取りあげたらどうかと提案した。一
九四七年五月に伊藤が京都で創刊した「岳人」
は一九四九年三月からは中日新聞に譲渡され
た。しかしその後一九六〇年まで伊藤が編集
長だった。私は伊藤は六月号の知床への提言
を見て、これはと思い早速ルームに来たのだ
と思った。日本のさいはての未知の地の厳冬
期の登山、ヒマラヤのトレーニングになるだ
ろうの言葉にみなは一遍に魅せられてしまっ
た。みなでやろうと拍手したことを覚えてい
る。ただリーダーの藤田陸奥磨は慎重な顔だ
った。リーダーとして彼の頭には一年間の計
画があったのだろう。突然に降ってきた冬の
計画にすぐには賛同できなかつたと思う。

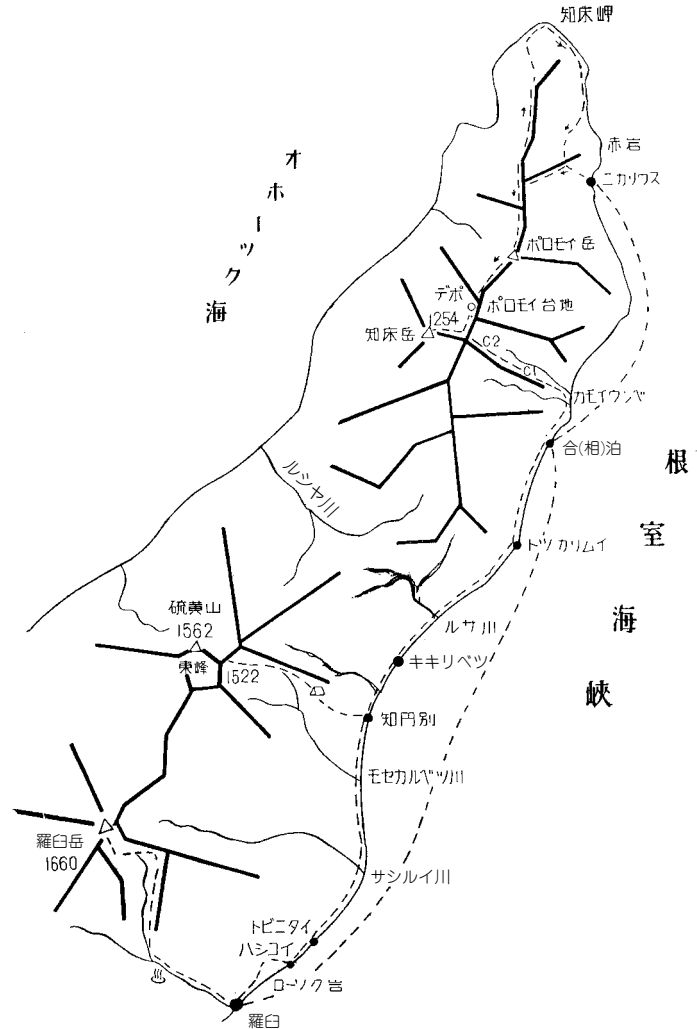
一九五二年はA A C Kから日本山岳会へ移
譲されたマナスル計画が始まった。偵察隊に
A A C Kから隊長今西錦司、科学調査中尾佐
助、医師林一彦の参加が決まっていた。医師
候補には伊藤、林の二人の名があったのだが
今西隊長は林を選んだ。人選の事情をA A C
K五十年史「ヒマラヤへの道」には、若手が
林を推し、藤村良がそれを東京にいた今西に
伝えるに行ったと書かれている。

新生山岳部の最初の夏山合宿は一九五〇年
の剣だった。旧制富山高校出身で剣で育った

林と一緒に入山指導した。そしてみな林の果
敢で勝れた岩登り雪渓の技術の洗礼を受けた。
翌一九五一年の夏は穂高だった。入山より
連日の雨でテントは水びたしになった。やっ
と晴れて入山してきた伊藤の指導をうけた。
屏風岩正面岩壁の夏、冬期初登攀の輝かしい
山歴を我々は伝え聞いていた。しかし肥満し
た体型で信じられないぐらいの登降スピード
だった。

しかし伊藤はすさまじいほどのヒマラヤへ

の夢と情熱を持っていた。この時の伊藤の落
胆ぶりは見るも痛々しかったと平井一正が伊
藤夫人に聞いている。この失意のなか伊藤の
頭にひらめいたのが知床だったと思う。藤平
正夫が北陸銀行の小樽支店に勤務していた
時、富山高校の後輩で北大山岳部にいた佐伯
富夫より知床のことを聞き、伊藤に伝えてい
た。「岳人」の知床への提言の執筆者XYZ
は多分伊藤自身だったのではないかと後年思っ
たが、伊藤に直接確めていない。



知床半島概念図
(「山岳」48年より改変)

知床の偵察、準備

知床の山の様子も交通事情も情報は無いに等しかった。夏の剣合宿が終つてから広瀬幸治、脇坂誠、川瀬裕史の三人が偵察に派遣された。八月一日京都を出て札幌に一泊し八月七日の夜やつと羅臼に着いた。翌日早速昆布とりの番屋を連絡する船に便乗しカモイウンベ川口に行き、川を遡行して知床岳へのルートを試登した。北海道特有の身の丈もある這松を漕ぎ分けて稜線まで達して一帯の地形を観察している。歩きにくい海岸の道を歩いてキキリベツまで行き、そこから船で羅臼に帰った。その後、広瀬、脇坂は羅臼岳に登った。

偵察隊が羅臼の東本願寺派の誠諦（じょうたい）寺の西井誠誘師と知合いになって、知床の事情を聞き、援助を受けたのは幸いだつた。西井師は一九三九年に羅臼岳に登つておられ、数少ない知床の山に詳しい人だつた。

冬期海岸を伝ふことはきわめて困難、船で隊員荷物を運ばねばならぬだろう。知床岬の手前のニカリウスなら上陸可能、カモイウンベの手前の合（相）泊には温泉があつて越冬家族の番屋があり、使用お願いでできるだろう。正月一〇日も過ぎると海は流水、陸は雪で交通途絶するのでそれまでに計画を終つて引揚げねばならないなど知つた。

北大の山岳部も尋ねている。そのころの北大は日高を中心に活動していた。知床などより日高がいいですよと薦められたそうだ。防寒対策としてズボンの内側の大股前面に毛皮を縫付ける。羽毛服などヒマラヤ登山隊がやつと使い始めたところである。ヤッケのフード

の縁に五cm幅ぐらいの毛皮を縫付けておくと防風防寒になるなど教えてもらった。犬の毛皮を買つてきた。ズボンには暖かいように捲毛の犬の皮を縫付けた。ヤッケのフードは写真で見るとエスキモー風になつた。

装備では脇坂がそのころ貴重だつたナイロン布にビニールコーティングして、風を遮断する生地を特製し、三人用テント一張作つた。通気は悪く二〇kgぐらいはあつた。内外とも氷はつかず設営も簡単だつた。岬より縦走した隊が使つた。国産のナイロンザイルも初めて使つた。

私は食糧担当だつた。ヒマラヤ登山の食糧の研究に熱心だつた藤村元リーダーと相談して準備した。行動食は米食を全廃した。乾パンと陸軍が使用していた α 化澱粉の尾西餅のみとした。粉を水でこねるとすぐ餅になる。きな粉が磯じまん、魚のでんぶをつけて食べた。乾パンも本田製パンに頼んで何度か試作しレーズン入と塩味だけの二種にした。野菜はキャベツ、ジャガ芋を陸軍糧秣製造の経験のある工場で乾燥した。 α 餅、乾パン、乾燥野菜など軍隊の糧秣製造の技術を活用したことになる。ビタミンCの補給は、米軍放出のクエン酸、ビタミンC入のレモンパウダーを溶かして飲んだ。たいへん酸っぱい飲物だつた。その他、南極隊の食糧のペミカンも試作した。歐洲南極隊のレシピを真似たらあまりにも脂肪が多く食べ辛かつた。伊藤夫人の指導でバター二五〇gを溶かし、ミチン切りの玉ねぎ、人參、挽肉、パンを入れて二時間ほど炒める。これを缶詰にして持参した。一応

好評だつた。

このように準備はいつもの国内山行と違つた心構えと研究を必要とした。国内だが我々にとつて、京都よりはるか遠い北海道の果ての登山は、まさに遠征であつた。準備中に誰からともなく知床遠征と呼ぶようになった。

全体の経費は約二五万円だつた。先輩の寄付と隊員負担で約一〇万円、笹ヶ峰ヒュッテの収益その他で約五万円、あとの一〇万円は毎日新聞後援となり提供を受けた。毎日新聞はマナスル登山隊を全面支援することが決つていた。よくぞ知床を後援したと思うのだが、桑原武夫たち諸先輩の援助によるものと聞いている。毎日知床に記者の北尾、カメラマンの依田を派遣して報道した。依田は知床での経験と実力が認められ、マナスルの全隊に参加、第三次隊では広く国民に感動を呼び起した「マナスル登頂」の映画を撮影している。

出発、第一次計画

我々に知床の存在を教え隊の成立をすすめた伊藤洋平隊長以下、副隊長藤村良、山口克、杉山喜一のOB、広瀬幸治、脇坂誠、中島道郎、中川潔、斎藤惇生、寺本巖、川瀬裕史の現役計一二名の隊であつた。一二月八日脇坂・中川・川瀬が先発、一二月一〇日残り九名が夜青森行の「日本海」に、発送が遅れた大量の荷物とスキーを抱えて乗りこんだ。青函連絡船、札幌、釧路、標茶を経て一三日夜根室標津に到着、公民館に泊めて頂いた。一四日は快晴だつた。半年間講義をさぼり、寢食をけずり準備を重ね、夢に見続けた待望の

白く輝く知床の主脈の山々に感動しながら、バスで夜羅臼に着き西井師の誠諦寺に到着した。

第一次計画は隊のなかでスキーの巧い藤村、中島、馬力のある脇坂の三名が岬近くに上陸し岬より主稜線を南下する。本隊は合泊をBCにして、約1km北のカモイウンベ川口より尾根を登り、ポーラメソッド風にC1、C2を設置し、知床岳東側の台地で縦走隊を取容するのを目的とした。

この計画は船が出港できるかどうかの天候が最初の大問題であった。西井師の口添えで「日の丸」という一〇屯あまりの船をチャーターして一五日には荷物をすべて積込んだ。幸運なことに翌朝六時ごろ海は少し荒れていたが出港した。しばらくすると国後島の向うから真赤な太陽が昇ってきて、前途を祝福するかのようなだった。

先に岬隊をニカリウスで下ろす。いちだんと荒れ模様になった波を気にして船頭が真剣な声で急がす。木の葉のように揺れるはしけは三名をなんとか陸に下ろして帰ってくる。脇坂はこの時上陸してからはじめて靴を左右反対に履いているのに気付いたそうだ。船はすぐ引返す。慌ただしくて三名に落着いて激励する暇も無かった。

合泊では比較的波も落着いていて、はしけが何日か往復して隊員荷物すべて無事陸上げできた。そして夏偵察隊はカモイウンベ川口の松田政男さんの番屋に泊めてもらったが、その松田さんが子出藤（ねりふじ）さんの番屋をベースハウスにするよう手配して頂いて

いた。番屋のすぐ横が棟続きの温泉で疲れを癒すのに好都合だった。

子出藤さんは国後島からの引揚者で昆布拾いから生活を始めたという苦労人だった。夫妻ともたいへん親切だった。そして奥さんは鄙には稀の目鼻立ちの整った人だった。子出藤さんから漁に出てとれたカジカ、ホッケ、タラなどの魚や大きな蛸を時々頂き、乏しい蛋白質の補給になつて有難かった。私はゆでた蛸の足を切つてキャンプに持つて行きレモンパウダーの酢で酢蛸にしてみなで食べた。北尾記者は「蛸山に登る」と記事にした。

知床の冬の気象観測の記録は羅臼にしか無かった。それによれば比較的晴天が多く、三日に一日の晴天行動可能で計画した。しかし実際にはおおきく違つていた。知床半島の略中央で知床別の北五kmのルサ川を境にして、北の方は降雪、吹雪が多い。持つて行つた一台のラジオは海岸ではソ連の放送だけ入つた。C1まで登ると日本放送も入り天気予報も聞けた。しかし余り役に立たず、またいわゆる観天望気も全くで、朝起きて空を見て今日の天候を判断する毎日であった。ソ連放送のロシア語は一言も分らなかつたが、クラシック音楽の放送は楽しめた。

気温は合泊で零下五〜一〇度ぐらい、一〇〇mのC2では零下一五〜二〇度で特に寒かつた時はテント内で零下二五度、外は零下三〇度であつた。

岬隊の行動

岬隊は各自四五kgの荷物、スキーをはいた

足元は雪に埋れきつていないブッシュ、這松につまずき転倒、また岳樺に荷物がひっかかり転倒、降雪と北見側からの風に翻弄されながらの難行苦行の行進だった。一八日稜線にテントを設営、一九日に尾根を下つてやつと知床岬に到達した。海岸は広く風船岩を見つけて岬を確認している。その夜は無人の番屋に泊り、翌二〇日海岸を伝い赤岩から登つてテントに戻つた。二一日快晴となり稜線を歩き始める。二二日より吹雪が続き停滞前進をくり返しながらの悪戦苦闘が続いた。

二五日晴れ間に知床岳を見ている。ポロモイ台地で地図に無かつた氷つた池を通過、これは知床池と名付けられ地図に記載された。そしてついに本隊がつけた赤旗と新しいシユプールを発見した。この日、本隊の四名は赤旗を主稜線まで行き立てた。彼等が引返した後一〜二時間して岬隊は到着したのだった。現在のように無線を使つて連絡し合うなど無い時代の話である。この日杉山、川瀬は知床岳にスキーで冬期初登頂している。

翌日は必ず本隊と会えると岬隊は安心したのだが二六日、二七日と猛吹雪となつて動けなかつた。乾パン一日三枚、スープのみの食事。二八日朝風がなくなると、果報は寝て待てど動かずにいたらコールが聞こえた。すぐ寺本を先頭に平井、山口、斎藤が飛びこんできた。握手してからの開口一番は「乾パンをくれ」であつた。三名は乾パンをむさぼり食べ続け、藤村と脇坂はタバコを立て続けに吸つた。二四日にはタバコが切れていたので、煙の充満した狭いテントのなかで、彼等の汚

い髭面の笑顔は私は眩しく見ていたのだった。
(続く)

ボリビア・アンデスの山旅(その一)

阪本 公一

コカの産地ボリビア。チエ・ゲバラが、革命を起こそうとして失敗して殺された国ボリビア。ラパス空港が富士山より高い四〇八〇mの高地にあつて、空港を降りて急いで歩いたら息の切れる国。日本では、ペルー・アンデス程には知られていないボリビア・アンデ



ボリビア・アンデス最高峰サハマ 6,542 m
(登頂ルートは左の稜線・北西稜経由)

ス。そんな漠然とした知識で、ボリビアへ山登りに行ってみたいと思いだしたのが、三年前。

「南米の山は、明るくて、ネパールとは違う楽しさがありますよ。」と宮川清明さんを勧誘し、ボリビア・アンデスの山旅を計画し始めた。昨年夏から、スペイン語の勉強をはじめたが、今日覚えた一〇の単語も、翌日になると八つは忘れてしまう始末。私のスペイン語は遅々として進歩せず。「お父さんのスタ・ウステ、セニョリータ・エルモーサばかりね」と家内からかわれる始末。

昨年秋になって、登る山を、ボリビア山岳



パリナコタ 6,330 m (左の富士山に似た山) と
ポメラタ 6,222 m

会が頂上でサッカー大会を催したといわれるボリビア・アンデスの最高峰サハマ六五四二mに絞って、具体的に計画を立て始めた。この山なら、私たち熟年登山者にも、割と簡単に登れるのではないかとはいささか甘い考えで、登山と観光、ハイキングと盛りだくさんのプログラムを組んで具体的な計画に仕上げた。日程は、二〇〇五年六月一日から七月六日の二七日間の旅とした。

今回のメンバーは、登山組は、宮川清明さん、朝倉英子さんと私の三人。そしてハイキングと観光が主体の高野昭吾さんと、宮川ふみ江さん。二〇〇三年秋に、ネパールのアンナプルナー一周トレッキングを一緒に楽しんだ同じ五人の仲間。全員五五〇〇mの高度までは充分経験しており、このメンバーなら深刻な高山病の心配もないだろう。五人とも、日本山岳会京都支部所属の、最高齢七一歳、最少年齢六四歳のまさしく熟年登山隊が出来上がった。

ボリビアについてもっと知識を得て、ボリビア・アンデスの山旅にいきたいと、図書館やあちこちから資料を集めて、昨秋から真剣にボリビアについての知識を吸収し、具体的な準備を重ねた。

お金さえ出したら連れていってくれる山岳旅行代理店の公募登山には、全く興味がない。「面白いから登る、自分本位の山登り」を追求する自主・独立の全て手作りの海外登山が、我々の山旅の基本姿勢である。

一、ボリビアという国

ボリビアは、南米大陸のほぼ中央部にある南緯約一〇〜二三度にある海のない国（エクアドルの首都キトが、赤道直下）。面積は約一一〇万平方キロメートルで日本の約三倍。

人口は約八三〇万人。ボリビアの国土の約三分の一はアンデス山脈が占めており、六〇〇m級の高峰が一四座もある高原の国である。ボリビアの主要都市の半分近くが標高二〇〇〇〜四〇〇〇mに位置している。

南米の中で最も先住民の人口が多い国と言われており、人口比率は純粋なインディヘナ五五％、インディヘナと白人の混血メステイソが三二％、ヨーロッパ系一二％、そのほか一％となっている。

政治体制は、一九八二年より民政がつづいており、直接選挙による立憲共和制。大統領の任期は五年で、行政権は大統領にあり、一閣僚が大統領を補佐する。

ブラジル、パラグアイ、アルゼンチン、チリー、ペルーとの国境を接するが海に出口を持たない。国土の大部分を、アンデス山脈とアマゾン熱帯地域が占めている。

高原地帯、アマゾンとも一月〜三月が雨季となり、乾季は六月〜八月。ラパスの平均気温は、年間を通じて摂氏七〜一〇度くらい。

二、ボリビアの歴史と文化

スペイン人に征服される以前のはるか昔の、紀元前後に、チチカカ湖の近くにティワナク文化があったと言われており、九世紀から一世紀にかけてアイマラ系の人々によって大神殿などが建設され、ティワナク文化の

最盛期を迎えた。現在も、「太陽の門」「半地下神殿」等で有名なティワナク遺跡が保存されている。

一三世紀の初めにペルーのクスコ周辺から発生したケチュア系の人々による「インカ帝国」が急速にその勢力を拡大し、チチカカ湖周辺にもおよび、一五世紀になるとティワナクを中心としたアイマラ系の人々の地は、インカ帝国の勢力圏に組み入れられてしまった。

一五三三年にインカ帝国を征服したフランシスコ・ピサロに率いられるスペイン人は、豊かな銀鉱山を持つボリビアにも侵略し、ペルー副王領の中に組み入れられた。高品質のボリビア・ポトシから産出される銀は、スペイン本国にまで運ばれ、スペイン国王の植民地戦争に必要な大きな財源となった。

ボリビアの独立は、ベネズエラ、コロンビア、ペルー等を独立させたシモン・ボリバル傘下のスクラ將軍により、一八二五年に達成された。ボリバルの名前にちなんで、国名がボリビアと名付けられた。

一九世紀のボリビアは、政情不安な時代であった。近隣諸国との争いで、ボリビアは大きな領土を失い、海への出口を持たない内陸国になってしまった。

一九四一年、チャコ戦争に参加した青年将校や都市部の中間層を中心として、政治の改革を目指した「民族主義的革命労働党（MNR）」が結成され、一九五一年の大統領選挙で党首のビクトル・パス・エンテンソロが当選するまでになった。しかし、選挙結果に反

対する軍部がクーデターを起こして政権を掌握した。これに対し、MNRに率いられる鉱山労働者や市民達が武装蜂起し、一九五二年九月に「ボリビア改革」をおこし、社会主義路線のMNR政権が発足した。

しかし、経済面で停滞したボリビアをこれ以上社会主義路線で進めて行くだけの力がなくなり、一九六四年〜一九八二年までクーデターが頻発した。

一九八二年によく軍政権が退陣し、民政への移管が実施されて、民主的な政権交代が行われた。

今年二〇〇五年になって、現政権の行政に不満を抱く人々が、地方分権についての国民投票実施、憲法改正議会招集法の促進等を巡り、活発な運動を展開し始め、五月になると、いろいろな社会団体がデモ、道路封鎖といった抗議活動を活発に行った。このため、主要都市間の道路が封鎖されて通行出来なくなり、六月初めにはAA（アメリカン・エアライン）等の海外の航空会社が不安を抱き、ラパス空港に入らなくなった。我々がマイアミを出発する六月一日からは、何とかAAもラパスに飛ぶ予定との情報のもとに、とりあえずマイアミまでいこうと日本を出発した。結果としては、その日はラパスには着陸せず、サンタクルスに降ろされて、約一時間の国内便でラパスへ移動した。私たちがラパスに着して数日後に、現大統領が辞任し、市民側が要求していた最高裁の判事のエドナルド・ロドリゲスが臨時代理大統領になり、その翌週に臨時閣僚が選出された。ボリビア政情の

一時的な混乱は避けられ、とりあえずラパス市内も平穏な状態に戻ったが、今後ボリビアが政治的にどのような方向に進み、どのような経済的な施策がとられるのか、注目されるところである。

ボリビアには、戦前から日本人移民の歴史がある。一八九九年に第一回ペルー移民の中から九三人がボリビアのゴム農園就労に入ったのが始まりと言われており、その後は、鉱産物の積み出しの鉄道工事関係に従事する為の移民、そして一九五四―一九九二年の九州の炭坑失業者救済措置、及び農民移民として沖縄からの移住者があつたが、日本の高度成長とともにボリビアへの日本人の移民者が激減し、現在のボリビア在住日系人は約一四〇〇〇人とされている。

*以上、「地球の歩き方」、及び「ボリビア日系協会連合会」発行の資料を参考にさせていただいた。

三、ボリビア・アンデスについて

今回私たちが登りに出かけたのは、ボリビア・アンデスの最高峰サハマ六五四二mだが、この山はボリビア・アンデスにある五つの山脈の中の西の方にあるオクシデンタル山脈に属している。

大きく分けるとボリビア・アンデスは「東の山脈」と「西の山脈」の二つに大別される。アルティプラーノ（高原地帯）の東縁となるボリビア・アンデスの「東の山脈」は湿潤なアマゾンからの風を貰って豊かな降雪に恵まれ、標高五五〇〇mでも氷河が見られる山

塊で、北からアポロバンバ山脈、レアル山脈、そしてキムサルク山脈の三つがある。

アルティプラーノの西の縁となるボリビアの「西の山脈」は、南米中央部砂漠地帯に浮かぶオアシスのような独立峰からなり、オクシデンタル山脈とリペス山脈の二つがある。

ボリビア・アンデスは未だに未開拓な手つかずの山々が数多く残っており、アメリカン・アルパイン・ジャーナルの元編集長であるクリスチャン・ベックウイッツス氏も「ボリビア・アンデスは、今行つてみたい世界で三つの山域の一つである。」言う。

(一) アポロバンバ山脈

ラパスから遠いので、今でも手つかずに残っている山々が多い山域。一九五七年にドイツ隊がこの山域に入り、Orco (六〇四四m) 等数多くの初登頂の記録を残した。一九五八年にイタリア隊が *Champu Orco Norte* (六〇〇〇m) 他を数多く初登頂した。その後、一九六二年に一橋隊の倉知、中島、中村氏が *Acamani* (五六六六m) に初登頂している。

(二) レアル山脈

ラパスの北にある山脈で、ボリビア・アンデスで一番入りやすい山域である。主な山としては、イリマニ (六四六一m)、ワイナポトシ (六〇八七m)、イリアンプ (六三六八m)、コンドリリ (五八四八m)、チャチャコマニ (六〇四二m)、アンコウーマ (六二四七m) がある。

日本人の初登頂した山としては、一九六四年に東京外大隊が登ったワイナリアンプ (五九五〇m) とハンコラヤ (五五四五m) がある。

(三) キムサルク山脈

過去においてはボタ山ばかりと言われてきたが、一九八七年にドイツ隊の報告書でキムサルク北部の岩と氷の山々の美しさが世に紹介されて以来、世界の登山家の注目を浴びるようになった。

一九九〇年代に入り、「南米のカラコルム」などの異名が冠されるようになった。キムサルク北部は尖塔の岩登り、南部は雪と氷のピークへのクライミングに魅力がある山塊と言われている。

Korichuma (五五〇〇m)、*Atosama* (五五六五m) 他五〇〇〇m台の山が七〇程あるが、未だ名前も定かでない未開拓の手つかずの山々が残っている地域。日本人では、一九六八年に栃木県山岳協会がこの山域に入り、幾つかの初登頂をしている。

(四) オクシデンタル山脈

チリとの国境近くにある砂漠の中にあるオアシスと言うべき三つの独立峰がある。

サハマ (六五四二m) は、ボリビアの最高峰。一九三九年にドイツ隊のヨセフ・プレムにより、初登頂された。日本人では一九六四年の東京外大隊が西面から登頂。

サハマと相對するように並ぶ二峰は、富士山にそっくりなパリナコタ (六三三〇m) とその右となりのポメラタ (六二二二m)。

(五) リペス山脈

ボリビアの西にある最南端の山脈。「アンデスの聖なる山」と呼ばれているリカンブール (五九六九m) がある。

* 以上、増山茂著「ボリビア通信。ボリビ

ア・アンデス」を参照させていただいた。

四、いよいよポリビアへ

今回の旅では、ラパスで一番ホテルを経営されている日系一世の南雲謙太郎さんに随分とお世話になった。こんなに楽しいポリビアの旅が出来たのも南雲さんのお陰と思っている。

ラパスの街自身の標高が、三七〇〇〜三八〇〇mと富士山の高さ。海拔ゼロの海辺の街マイアミからいきなりラパスについて、ただちに登山活動にはいると高度障害になるのは目に見えている。折角はるばるとポリビアまで行くのだから、出来るだけポリビアを見て回りたいと、登山活動にはいる前に、一〇日ほどを観光を兼ねながらラパス市内及び近郊の街へ旅行にでて高度順応をしようとの計画をたてた。

サハマ六五四二m登山は、ラパスから車をチャーターしてサハマ村に入り、現地でローカル・ガイドや、ポーター、ラバの手配をしたいと当初考えていた。

ラパスで大きな旅行代理店と言われる鳥旅行社にメールでコンタクトをとったが、まともな返事が返って来ず。ようやく返事が来ても、チャランポランな回答ばかりで全く頼りにならず困り果てていた。やむなく、一番ホテルの南雲さんに御相談したところ、気持ちよくお知り合いの登山専門の旅行社 Colibri SRLを紹介していただいた。

ラパス登山は、通常ラパスの旅行業者はラパスから出入り五泊六日でのパックを組んでいるらしい。暇はいくらでもある私たち熟年

登山者は、出来るだけ余裕のある日程で、現地でも第二次の高度順応段階を設け、又サハマ近辺の名所見物にも行きたいと、一〇日間のゆったりしたスケジュールで Colibri に見積もりを依頼した。

Colibri の見積もりは大変リーズナブルで、ラパス・サハマ間の往復交通費（チャーター車）、テント、料理用道具一式、登攀用具、サハマ村でのロッジ宿泊費、及び一〇日間の全食費等、全て込みのお任せセットで、一人当たりUS六〇三ドルの見積もりだった。テント等装備や食料も全て自分たちで準備する費用と手間を考えると、Colibri に任せただ方が割安と判断し、全てセットで同社と契約することにした。

又、ラパス市内の観光、テイワナク遺跡の日帰り見学、チャカルタヤ山への日帰り順応ハイキング、コロイコへの一泊二日の旅、そしてチチカカ湖への二泊三日の旅行の費用も、合計一人当たりUS三〇七ドルで引き受けるとのことなので、観光の方も全て Colibri に頼むことにした。結果として、Colibri に全て任せて良かったと満足している。

六月一二日にマイアミ空港でラパス行AA九二二にチェック・イン。間違いなくラパスに行くとのアメリカン・エアラインの地上員の説明で、荷物もラパス止めに預けたが、出発一時間前になって、ラパスには着陸せず、サンタクルスに飛ぶとの説明。サンタクルスからラパスへの移動は、現地のAA係員が責任持って手配しているからの説明であったが、サンタクルスに着いたらAAは全く知ら

ん顔。結局、サンタクルスから、ラパスまでの国内航空運賃一人当たりUS一〇〇ドルの航空券を買わされてラパスに移動した。まあ、三時間程度の遅れで、ラパスにつけたのだから、US一〇〇ドルだけの出費ですんだのは、不幸中の幸いと言うべきか？

詳しいスケジュールにもとづく行動記録は、次号別表にまとめたので参照願いたい。観光期間の印象点のみ、下記することにした。

(一) ラパス市街は、絶対歩いて見るに限る。三日も歩くと、街の地図が頭に入り、親しみが一層深まってくる。ラパスはすり鉢状の、坂の多い街。最初は、息を切らして登った急坂の道も、慣れてくるとだんだん楽になってくる。

一週間ほど前は、労働者や市民のデモでかなり混乱していたらしいが、私たちがラパスに着いてからは、街は平穏そのもの。道を急ぐサラリーマン、仲間と話をしながら賑やかに歩く学生達のグループ。街角には、屋台の店もあちこちにておおり、道端に座ってポップコーンやパンを売るオバアさんやオバチャンの姿もみられた。ひつたくりにはあわないようにと、貴重品はホテルにおいて、街を歩いたが、ラパスの街の散策は実に楽しかった。山高帽子をかぶったオバチャン。スペイン系の血の混じった、ハツとするように美しい若い女性。ラパスの街角で見たいろんな光景が目に見え、本当に懐かしい。

(二) テイワナク遺跡は、見る価値のある遺跡。大きな石像のパチャママは「大地の母」と言われ、アイマラ族の絶対神らしい。全てを支配し、マネージする能力を持った神だそう。日本でも、家庭を牛耳っているパチャママがあちこちにいるが・・・。

(三) コロイコは、アマゾンの源流にあたるユンガスと言われる緑の多い花の咲きにおう標高一七〇〇mの保養地。ラクンバルという四四〇〇mの峠を越えて、断崖絶壁にかかる砂埃のたつ道を約三時間。毎年雨季になると、断崖から落ちて死亡事故を起こす車が多いというスリル満点の道。コカとコーヒの産地で有名。コカ農園に見学に行ったが、日本のお茶の木よりも背の低いコカの木から、農民は葉を摘んでいた。五〇ポンド袋詰めにしてラパスまで搬入して、ポンド当たりB10-(¥140-)の由。

マイアミからラパスに着いた翌日にコロイコへの旅に出かけたが、三七〇〇mのラパスからいったん一七〇〇mのコロイコまで高度を下げたのは、高度順応の為に大変良かったと思っている。

(四) チチカカ湖は、びわ湖の二倍もある大きな湖。油を流したような静かな湖。ヘイダールがコンチキ号で太平洋を横断した冒険旅行は有名だが、ヘイダールの為にトトラで筏を組んだポリビア人がコパカバーナのすぐ近くの村に住んでいた。チチカカ湖のポリビア領内にある太陽

の島は、景観豊かな島で、インカの遺跡もあり、標高四二〇〇m前後の島の尾根筋を歩く六時間のハイキングは楽しい。尾根筋から、チチカカ湖の向こうにレアル山脈の真っ白な山並みが連なり、壮観だった。

(五) チャカルタヤ・スキー場は、ラパスから車で約一時間半。車止めにポリビア山岳会の小屋があり、お茶が飲める。僅か三〇〇分歩くだけで標高五三九五mの頂上。手軽に高度順応ハイキングが出来るので、結構訪れる登山者が多いという。

(六) ポリビアの物価は非常に安い。そこそこ一流のレストランで食事をし、シャドネー・クラスのワインを二本飲んで、せいぜい五人でB400(1Bポリビアノ11四円、即ち約五六〇〇円)。

我々が泊まった三スターの一番ホテルは、朝食付きで一泊一人二〇ドル。宿泊費と食費で一日四〇ドルの予算を組んでいたが、かなり余裕があった。食費はパンと屋台での食べ物で辛抱すれば、一日五ドルくらいでの生活も不可能ではなさそう。

(続く)

AAACK人物抄

伊藤洋平さん(一九二二—一九八五)

伊藤洋平さん(通称ヨッペイさん、以下敬
平井 一正

称略) ほど毀誉褒貶の多い人は少ない。AAACKの歴史にはしばしば登場するほど活躍しているが、なぜかAAACKでは彼を評価する声は少ない。

パーソナリティにもよると思われるが、スタンドブレイの多かった行動が批判を招き、たとえば「伊藤の行動には自分の得のため、個人的名声のためというところが、見えかくれする」、「伊藤は自己の宣伝のためにAAACKを利用しただけ、貢献はしていない」、など一部に厳しい批判があることは事実である。また後年、過去の輝かしい山歴に比較して、体力、技術が見劣りしたことも批判に拍



車をかけた。しかし没後二〇年経ち、彼の足跡をふりかえるの必要でないかと思ひ、ここにとりあげる。

一、八高から京大へ

伊藤は大正一二年（一九二三年）二月五日、三重県津市で生まれた。生まれてすぐ両親とともにアメリカワシントン州タクマに渡った。船の洗面所（シンク）で産湯を使ったとき、アメリカに七、八歳頃までいたが、父の死によつて帰国。父は外科医であり、彼は幼いときから、野口英世のようになれと教えられた。帰国後鈴鹿の亀山師範付属小学校に入学、さらに津中学に進学。ここで博物班に入つて、鈴鹿の山を登つたのが、登山をはじめるきっかけとなつた。さらに伊藤は第八高等学校理乙に入学する。山岳部に入つたが、最初の山が遠見尾根から鹿島槍の縦走であつた。山のヤの字もしらない伊藤にとつてかなりしんどい登山であつた。しかし入学後一年目で胸をやられ、一年間休学した。復帰後、穂高を中心とした登山に熱中、そして昭和八年（一九四三年）京都大学医学部に入学。まもなく終戦。英語が得意であつたので、進駐軍用に日本語を英訳したりしたが、よく外国の本を読んでいた。

二、屏風岩登攀

伊藤は京大に入学後も、八高山岳部のOB会である山稜会で登山活動をしている。その登山歴のなかで特筆すべきは、穂高屏風岩正面岩壁にかけた一連の登攀であろう。彼の屏

風岩に関する活躍を拾ひ出してみる。（「岳人」第七、第一〇号、昭和三年）

一九四二年三月 横尾合宿、ここで正面岩壁の登攀が話題になる

四四年三月 伊藤、藤井、徳本峠から横尾に入る。大雪のため退却

七月 伊藤、大津、正面直下から取り付き、八高テラス発見

一〇月 伊藤、大津、一〇月五、六日初登攀成功（北壁）

四六年八月 伊藤、石岡ら、正面岩壁のルート再挙、横断路完成

四七年七月 伊藤、村山、第一ガリー上半の下降（遭難救援）

一月 伊藤、稲垣、正面岩壁下の試登

四八年三月 伊藤、大津、正面岩壁積雪期初登攀

この記録で見られるように、伊藤が屏風岩正面岩壁にかけたなみなみならぬ情熱は、終戦（一九四五年）をはさんで、汽車の切符もなかなか買えず、装備、食糧もままならなかつた当時の社会情勢を考えると、余人のまねのできないものである。

伊藤の屏風岩正面岩壁については、石岡繁雄著「屏風岩登攀記」（中公文庫、昭和五年）にも書かれている。ここにくわしくなるが、同書から抜粋して紹介しよう（石岡繁雄の弟が、のちに前穂四峰でナイロンザイル切断で転落死亡した。そのために、彼はナイロンザイルの試験をした篠田軍治と終生争つた。井上靖「氷壁」のモデルでもある）。

屏風岩は、当初人をよせつけぬ岩壁とおそれられていた。伊藤は四四年の春、八高の三年上の先輩、石岡繁雄を訪ね、一枚の写真をみせる。それは三月の屏風岩の写真であつた。もし屏風岩が難攻不落であれば、なぜ雪がこんななについているのか、実際の傾斜は見た目よりゆるいのではないか、というのが伊藤の推理である。その結果、彼は八高テラスを発見する。そして一〇月、一年先輩の大野嶺夫と正面岩壁に挑むが、テラスから上は登れず、日をかえて右寄りのルートをとり、灌木をつぎつぎに求めて壁の上に出た。伊藤はこれをもって正面岩壁初登攀といつたが、四五年夏、横尾を訪れた石岡は、このルートは横尾の岩小屋から見える正面岩壁ではなくて、その右にかくれた裏側の北壁のうち、慶応稜のP3というピークに至るルートであることを指摘した。伊藤もこれに同意した。

そこであらためて石岡、伊藤により、本当の意味での正面岩壁登攀が再挙された。それが四六年八月一九日である。かれらは八高テラスからの横断ルートを発見するなど、執拗にルートを探つた。さらに同八月二四日、石岡らはさらにルートをさぐり（このときは伊藤は参加していない）、中央カンテ沿いに灌木帯を縫う横断ルートを完成させた。そしてこのルートからの正面岩壁登攀に最後の望みをかける。そして石岡はそれを翌年夏、伊藤とふたりで決行する予定をたてた。

しかし四六年一二月、雑誌「山小屋」一三一号に、伊藤が「屏風岩正面岩壁初登攀」として、四四年一〇月の登攀をはじめて記事に

した。伊藤のその登攀はいわゆる「正面岩壁」の初登攀でないことは、彼も認めているのに、なぜこういう記事をしたのか、また同記事で、四六年八月二四日の横断ルート完成が、石岡、伊藤になっている（本当は石岡、松田、豊田である。このとき伊藤は体調をくずし、下にいた）。これを見た石岡は憤慨し、翌年夏の登攀を伊藤でなく、神戸中学生の松田、本田と三人（岩稜会々員）で決行しようと決心をする。ただこれは伊藤には黙っていた。伊藤は来年夏、涸沢でハーケン四〇本を準備して待っていた。石岡ら三人は、四七年七月、懸案の壁に挑み、松田の人間技と思えないリードによって、一日ピヴァークの後、遂に正面岩壁を登り切った。しかしここでアクシデントが起こった。石岡に最後のフェースを登るだけの体力がなくなっていて、どうしてもここを登ることができない。仕方なく、彼は、若いふたりに、さきに下山して、涸沢にいる伊藤に救援を求めよと命令する。

三、遭難そして救出

石岡はひとり第一ガリで救出を待っていた。はげしい渇きと空腹の三〇時間がすぎた次の日もくれる頃、「ヨッペイだ。救援にきたぞ」というコール。このあたりの地形を熟知している伊藤が、八高の山岳部を指揮して、真つ暗闇の中、第一ガリを経て、無事に救援に成功した。広いフェースのなかで、石岡をみつめ、真夜中にここから救えるのは伊藤以外にはいなかった。すべての確執をのりこえ、自分の危険もかえりみず、さっそうと活

躍した伊藤の姿に感動を覚える。

なるほど正面岩壁初登攀と言うのは適当でなかったし、また自分が行っていない横断ルートに、自分の名前をつけたのはたしかにフェアではない。すべきでない行為であった。功名心に焦った勇み足であろうか、彼の人望が失われていく原因の一つかもしれない。

なお四八年（昭和十三年）「岳人」七号で、山稜会、八高山岳部、岩稜会の共著で屏風岩正面岩壁登攀史が総括され、記録が正しく整理されている。また七八年、日本山岳会会報「山」において、屏風岩初登攀は四七年七月の石岡らによると認められた。

四、詩人伊藤洋平

伊藤が詩人であったことを知る人は少ない。彼は京都大学に入学後、白井書房（京大北門前）の白井さんなどと詩の会を作り、ここから同人雑誌「詩条」を発行していた。学園新聞にも友の鎮魂の詩を書いたこともある。こういう縁で、彼の創刊になる山岳雑誌「岳人」は、初期の頃の発行所は白井書房内岳人社とある。

彼は一九四六年に詩集「掌の思想」を書いている。大学ノートに七〇ページの草稿であるが、出版された本は知らない。これを詩人加藤千晴氏が読後感を書いている。「『掌の思想』を僕は限りなく愛読しました。一気に読んでしまいました。どの詩も心をうつものです。僕は近頃としてこんな気持ちのよい本を読んだことがありません……」

五、「岳人」創刊

四七年一月一二日、伊藤洋平、池田孝蔵、杉山喜一の三人は猿倉小屋を出て、白馬尻でビバークし、翌一三日に小蓮華岳、白馬岳に登頂している。この一二日のビバークのとき、深夜ツェルトの内側に結ぶ雪の結晶を眺めていたとき、この「岳人」の創刊という夢がフツツと沸いてきたという。そして紙の統制という厳しい社会情勢にもかかわらず、その年の五月に創刊第一号が誕生したのである。スポンサーに池田の父がなった。

「岳人」に寄すとして、今西錦司は、「京都から山岳雑誌が出るという、愉快である。しかし、いちばん心配なのは、この雑誌がいつまで続くか、ということである」と書いた。当時は全くのかけだしで、名前も知られていない伊藤であった。その無名の若者が山岳雑誌を出すというので、今西ならずとも果たして続くのか心配するのは当然であった。当時「山とスキー」、「山」、「ケルン」などすべて廃刊になっていた。日本山岳会の会報「山岳」が再発行されたのが、その翌年の一九四八年であることを思えば、いかに時代を先取りした発刊であったかがわかる。そしてそれが今日まで六〇年近くも存続していることも注目すべきである。

伊藤は編集後記で、「岳人」は純粹な山岳雑誌として岳界復興のための捨て石となりたいと念じている、そのために正統登山の本道を追求したいと思う、と書いているが、たしかにその内容は遠くヒマラヤに照準をあてたものであった。

六、結婚そして多彩な活動

一九四七年（昭和二十二年）、伊藤は京大医学部を卒業し、微生物学研究室に無給助手として残った。実はこの前年の四六年十一月、伊藤は綾子夫人と結婚している。夫人の母が短歌会に入っていた関係で知り合ったのであるか。夫人の父が、京大医学部を卒業し、臨床雑誌の編集などをしていた関係で、勧められて、今小路診療所という小さい診療所を構えた。アルバイトの診療では生活が苦しかった。

伊藤は戦後のまだ物がないうちに、バイクを持つていたり、八ミリカメラをまわしたりしていた。多才であった。詩の創作もそうであるが、写真にもセンスがあり傑作が多い。また「岩登り技術」、「回想のヒマラヤ」など山に関する著書、「K2非情の山」などの訳書、さらに、写真集「雪と光と夢」（白水社、昭和三年）などがある。この中には珍しい空撮の剣の写真がある。その他アンナプルナの豆本もある。

七、ヒマラヤへの始動

戦後の混乱期当時、京大山岳部には、旧制高等学校の山岳部出身の藤平、舟橋、伊藤、林らが集まっていた。三高山岳部の流れをくむ京大旅行部との接触はなく、反目状態であった。四六年の年末、伊藤は藤平らと相談してマッキンレーを考えた。費用の点と、氷壁と岩に対する自分達の実力を確かめたかったからである。相談を受けた梅棹が、「ヒマラヤの無念をヒマラヤで果たさずにどこで果た

すのだ」と机をたたいて激怒した話は有名である。この会談で京大山岳部の現役と旅行部との接触ができた。伊藤はマッキンレーをよろし、ヒマラヤを現実のものとして考える。そして四七年には、カンチェンジュンガをヤルン氷河からやることを考えたが、まだ機は熟さなかった。

伊藤はその後一時母に乞われて、故郷鈴鹿で開業した。京都では食べ物にも事欠き、また故郷で開業していた医者が死んで、後継者がいなくなつたためである。夫人がびつくりするほど多くの患者が押し掛けたという。しかし田舎では研究はできない。彼は研究をやりたいかつた。そして開業医をやめて京都に帰つた。

四九年、ネパールが門戸を開き、その翌年には、いちはやくフランス隊がアンナプルナ I（八〇九一m）に初登頂した。伊藤は焦つたが、まだ日本は講和条約もまだ結んでいない状態であった。五一年、伊藤は今西をたずね、ヒマラヤ計画をくどく。「佐助と相談してこい」という返事をもらい、伊藤はその足で中尾の家を訪ねる。（徳岡・ヒマラヤ、毎日、昭和三九）

藤平、舟橋はすでに四六、四七年に卒業し、若手では伊藤ひとり、ヒマラヤへの歯車を動かすべく奮闘していた。五一年末、目標の山は今西、梅棹、中尾、伊藤らが相談した結果、マナスルに決定。さらに五二年には西堀が苦心の末、ネパールへ入国、そして国王から、口頭でマナスル許可の約束をもらう。西堀三月帰国。今西はマナスルを生物誌研究会（略

称FF）の名で申請した。（AACKが再建されたのは五二年の春）。いろいろな理由から今西は、四月、このマナスル計画をJACに移譲した。そしてこの五二年の秋、今西を隊長とするマナスル偵察隊が派遣される。

医者を誰にするかでもめた。京都から伊藤と林の名が上がり、結局林になった。このとき伊藤の落胆は大きかった。綾子夫人はその落胆ぶりを正視しがたかつたという。ヒマラヤの重い扉をあける原動力として、伊藤は、金もない生活をいとわず、夜おそくまで長年孤軍奮闘してきた。たしかに伊藤には混沌とした状態から、このヒマラヤ計画を具体的にしぼりあげてきたという自負がある。しかしどうにもならなかつた。来年の本隊に入れる可能性はなかつた。京大が作つた計画なのに、東京勢がほとんどを占めた。

八、知床からアンナプルナへ

なんとしても今西に山岳部の実力を示す必要がある、こう考えた伊藤は、当時小樽にいた藤平からきいた知床の冬期登山をやるうと決心した。

伊藤は、五一年の夏の穂高合宿、五一年から五二年にかけて冬の穂高合宿など、現役の合宿に参加しており、山岳部の後輩たちとのつながりがあった。彼は、大学院生や山岳部の現役からなる一二名の隊を組織した。毎日新聞から記者二名が参加するなど、戦後の大雪山山岳部の登山として画期的なものであり、ヒマラヤ遠征の雛形のようなものであった。計画は五二年冬に実行された。知床山脈の縦

走をはじめ、未知の知床池やポロモイ台地の発見、さらに知床岳、羅臼岳登頂など登山は成功した。その祝賀会がピアホール「ニューキョート」で開かれたとき、今西も顔を出した。伊藤は嬉しかった。

マナスルみたいな山をJACにやって、とAACの若手の憤懣に呼応する形で、五三年五月、今西は、中尾情報に基づき、アンナプルナII峰（七九三七m）登山を計画、そしてその年の秋、今西寿雄を隊長に、藤平、舟橋、伊藤、藤村、脇坂、立平（報道）からなる隊が出発した。伊藤はよつとの思いでヒマラヤの土をふむ。しかしこの隊は、IV峰（七五二五m）登頂寸前でジェットストリームにテントを破られ、敗退する。この痛手が快復するのに五年の歳月を要した。五年後、知床の隊員が主力になってチヨゴリザ（七六五四m）の初登頂に成功し、以後AACはヒマラヤで次々と初登頂をなすとげる。その意味で知床の意義は大きい。

九、アンナプルナ以後

伊藤はその後AACの登山には参画していない。アンナプルナから三年後の五六年には、第一次南極観測隊（夏隊）に参加した。その後京大から奈良学芸大（五八年）、そしてそこからアメリカのワシントン大学に、微生物学の研究を行う（五九〜六一一年）。その後、名古屋の愛知ガンセンター研究所に移り、ウィルス部長として活躍する（六四年）。

一方、JAC東海支部副支部長となり（六七〜七二、支部長は熊沢正夫）、七〇年には

JAC東海支部マカルー（八四八一m）遠征隊の隊長として、募金活動や渉外など活躍し、東南稜からの登頂成功に導いた。登攀隊長であった原真は、その著「快樂登山のすすめ」（東京新聞出版、九七）で、「（伊藤は）『熊沢先生をあまり働かせるのは、申し訳ないからな』と言いつつ精力的に働いてくれた」、と書いている。頼まれればイヤと言えず、隊の為に努力した伊藤の姿がある。余談だが、マカルーから帰ってすぐ屏風岩登攀二五周年記念の集まりを石岡や大津などを交えてやっている。確執もすべては消えていたのであろう。

一〇、研究者伊藤とその死

会員中島道郎は一九六一年、アメリカのバージニア大学医学部微生物学教室に留学したとき、Shope's Papillomaと呼ばれる野性ウサギの皮膚腫瘍が、ウィルスによつて発症する腫瘍であることを世界で初めて突き止めたのはDr. Yohei Itoという日本人である。Dr. Itoは、ウィルスで腫瘍を作つて見せた世界最初の人物である、と聞かされ、びっくり仰天した、と述懐している。

この事実からもわかるが、伊藤は微生物学、なかでも腫瘍ウィルスの世界的権威で、ガンウィルスに関して多くの世界的な業績を残し、米国ガン学会海外特別会員、国際比較白血病学会会長をつとめた。六三年に野口英世記念栄誉賞、七二年に米国ガン特別計画功労賞を授与されている。七三年一二月、京大医学部微生物学教室教授になり、後に八一年一二月には京大医学部長になっている。輝かし

い将来が期待されていたが、悪性の胃ガンが体を冒していたのに気がつくのに遅すぎた。そして一九八五年七月二六日早朝、闘病の甲斐なく、この世を去った。現役の医学部長であり、余りにも早すぎる死であった。（伊藤のガン研究の紹介とそれに関するエピソードが、山根一真・悪魔の遺伝子、文芸春秋ノンフィクション、一九八七年四月号にある。）

医学部同期の中野進は追悼の辞で述べている。「君は皆に愛された、：友情を大切にしていた、クラスの人々にも親切であった。その高い地位にありがちな冷やかさを感じさせず、微笑みでもつて素朴な平凡な願いにも面倒がらずに応じてくれた。（中略）君は一世の風雲児、英雄だ、学者にして将、我らの冒険ダン吉だった。：」（我が友伊藤洋平君をおくる、あゆみ、No.153、一九八六）

一一、おわりに

伊藤の行動については批判があることは事実であるが、一方、林一彦と並んで、戦後の山岳部の活動に多くの影響を与えたことは否定できない。国際人でもあり、すぐれた研究者でもあった伊藤が、AACでなぜ評価が低いのか、残念である。

藤平は言う、あの戦後の混乱期の中で、ヒマラヤ遠征を考え、実現の端緒を開いたのは伊藤君であった。考えている人はたくさんいただろうが、実際にアクションを起こし、手がかりをつかみ、京大グループを結集させるきっかけを作つたのである（山岳、八〇、一九八五）。今西寿雄も同様なことを「アンナプル

ナ日記」(茗溪堂、昭和三年)に書いている。

一九八二年の夏、宇奈月でアンナプルナ、チヨゴリサの同窓会をしたとき、私はたまたま一週間ほど前に見舞った脇坂の病状を皆に報告した。伊藤はその容態のただならぬことを察知して、早速彼を見舞った。それからしばらくして脇坂は亡くなった。彼の追悼集をだすとき、伊藤はたくさん写真を提供してくれた。伊藤は心暖かな人であった。

綾子夫人とはたびたびおめにかかる機会があった。本文の細かいところは夫人から聞いたことである。夫人はすでに亡くなられ、ひとり娘のユリさんが居られる。オートバイで京都から岡山まで仕事に行かれるほどの活動的な人である。北白川のご自宅を整理されるときに会員前田司、斎藤清明と二人でお伺いし、貴重な資料を入手した。現在は東京で映像関係の仕事をしておられるが、消息は不明である。(ご存じの方はおしらせ下さい)

本稿を執筆するに当たって、永田秀樹氏、原真氏、その他梅棹忠夫、近藤良夫、山口克広瀬幸治、中島道郎ら多くの会員からご教示とご批判をいただいた。記して感謝する。

鈴木信さん追補

—野田吉兵衛、近藤公夫両氏
からのコメントの紹介—

平井 一正

AACK ニュースレター三五号に掲載した「鈴木信さん」について野田吉兵衛さん(昭和一八年)と近藤公夫さん(昭和二八年)か

らコメントを頂いた。

野田は鈴木を指導について語る。

私が一年生のとき、鈴木は教育係でいつもこわい顔をして山岳部のルームに座っていた。美津濃の外交は「どなたですか、あの人は」と聞いていたほどである。冬の蔵平の合宿は朝六時から夕六時まで、みっちりトスキーの猛訓練が行われ、夕食後、二階に上がっていくと、真面目にやるとれば這って上がるはずや、訓練が甘いと叱られた。一四年三月雪倉に登ったが、私は先発で何度も往復してBCを張ったところに鈴木リーダーの本隊がきた。やっとおちついてテントの中で吉良とだべっている、お前らスキーは十分上手と思っているのか、出てきて練習せいと鈴木が雷が外より落ち、皆飛び出したこともあった。

近藤も鈴木のリードシップについて語る。

一九四九年、すでに三高は京大に吸収され、三年生（山岳部員は真砂博成、平井章一）しか残らない状態であったが、その中で南アルプスで事故発生。その救援対策として、プレジデント真砂が鈴木と協議、即日吉井部長以下の救援隊が出動、近藤は京都駅に見送りに行った。真砂の言葉を思い出すと、「鈴木さんのお宅に早朝駆けつけたら、平然としてよっしゃ、わかった、といわれて人心地がついた」と。鈴木は当時の三高山岳部の先輩として、第一線をこなす最もたよりになる存在であった。

鈴木にまつわる歌についてもコメント頂いた。

『スズキマコトはえらい人、スズキのオヤ

ジの息子にて、アリヤマアコリヤマア、足を折った今日この頃は、ストック突き出し、ありやこりや。スズキマコトが初めて北沢のぼるとき、岩に腰掛け、カニにエトバスはさまれて、あいたたのコンチクショウ、何さらす、でも気持ちがよいわいな』（工楽英司の歌に『クラクヒデシはエライヒト、工楽少将の息子ニテ』）、また福井亀之助の歌に、『カメノコタワシの分家ニテ』などの替え歌がある。『今西さんのアゴは長いな、ロングゲロングアゴ』のように、当時先輩にこのような歌詞をつけて歌をうたうことが多かった。このような歌詞は当然ながら経年変化をとげる。野田から一〇年後輩の近藤の時代になると歌詞も変化する。

『足をチンした今日この頃は看護婦相手に天井眺めてニヤニヤ』、という歌詞もあり、また、『鈴木信さん、はじめて北沢のぼるとき、岩に腰掛け、リュックをかたえに投げ出して、コンチクショウのコンチクショウ、何さらす、ええまた明日とりにくる』、とへばった鈴木をからかう歌に変化している。コメントいただいた両氏に感謝する。

会員動向

会員異動

訂正

ニューズレター前No.35における

理事会決議録

総会決議録

海外登山・探検助成制度の創設

AAACK遠征基金について

日本山岳協会・山岳共済（一般共済）について

の五本について、標題「事務局報告」と、執筆者名「事務局長 吹田啓一郎」の記載を致しておりませんでした。ここにお詫びし訂正致します。

（編集 田中昌二郎）

「第二回雲南懇話会」と

「第一回 Field Work」のお知らせ

「第二回雲南懇話会」と「第一回 Field Work」を、下記のとおり開催しますのでご案内します。参加ご希望の方は、それぞれ前田栄三

までご一報ください。皆様お誘い合わせて多数ご参集ください。

第二回雲南懇話会

一、日 時 懇話会 平成一七年一月一日

日(土)午後二時～午後五時三〇分

茶話会 同日 午後五時四五分

午後七時三〇分

二、場 所 JICA国際協力総合研修所・国際会議場

電話 03-3269-2911

【JR中央線「市ヶ谷駅」下車、徒歩一〇分、旧「日本育英会」の隣り】

三、懇話会の内容

・トピックスの紹介「崑崙の未踏峰(六三四五m)登頂の概要」

前田栄三会員

・「四川省・レッドメイン峰(六一一二m)登頂の記録と麓の風景」

学習院大学山岳部OB、小川典祐氏

・「聖山(梅里雪山)の麓の暮し」

——第一回 Field Work の報告を含む——

小林尚礼会員

Field Workにおける学術的視点からの補足

安仁屋政武会員

・「ミャンマー・カカボラジ峰(五八八一

m)登山の記録とミャンマー北部の風景」

一橋大学山岳部OB、古瀬泰介氏

・「ブータン東部の農民の生活」——民間コンサルタントの調査結果から——

JICA国際協力専門員、三部信雄氏

・「ヒマラヤにおける氷河変動」

名古屋大学大学院環境学研究所、京都大学

山岳部OB、藤田耕史氏

四、懇話会参加費用 二千元(二〇～三〇歳

の青年、学生・院生は千円)

茶話会参加費用 一律 三千元(茶話会
は同研修所内施設で行います。)

第一回 Field Work

一、二〇〇五年一〇月二三日(日) 関空出発、

約二週間(最長一五日間)の日程。

二、行程 昆明→徳欽→明永村→雨崩村→飛

来寺→香格里拉→麗江→大理

三、定員 九名 (小林尚礼会員が同行しま

す)

四、その他 参加者数、現地事情等により、

行程など変更する可能性があります。

以上

雲南懇話会幹事 前田栄三

編集後記

■今回巻頭を飾った知床の写真には、一寸し

たドラマがあつた。撮影者寺本会員は、永らくそのネガの行方を捜していたが、このたび

五〇余年ぶりに、毎日新聞の古いネガファイル

に入つて見付かった。「初恋の人に会つた

ような懐かしさと嬉しさでした。」と激白さ

れている。「近頃DPE屋も扱つたことのない

ブローニー六×六版のしかも白黒」とあつ

て、現像にも苦勞していただいたと聞く。あ

りがとうございました。

■「ボリビア・アンデスの山旅」は、核心部

の登山篇が次号廻しになってしまいました。

ご了承下さい。

■崑崙登山や雲南フィールドワークなどの知

らせも聞こえてきます。次号に報告をお願い

しています。ご期待下さい。

■次号原稿締切日は一月一日、発行予定

は一月中旬を予定しております。奮つてご

寄稿下さい。(田中昌二郎)

編集委員

田中昌二郎

発行日 二〇〇五年九月末日

発行所 京都大学学士山岳会

〒611-0011 宇治市五ヶ庄

京都大学防災研究所

吹田啓一郎 気付

製作 京都市北区小山西花池町一一八

(株)土倉事務所